



第 4 号

平成 25 年 12 月 25 日
岩手県長寿社会課

「できる力」、見つけて伸ばそう！

「夢のみずうみ村」研修会の巻

住み慣れた地域で生き生きと過ごし続けるには、何よりも心と体が元気であり続けることが大事です。今回のテーマは「リハビリ」についてのお話をレポートします。

講師のデイサービス施設では、様々な仕掛けで要介護度の改善に取り組んでいるとのこと。その秘訣は何か?! これからちょっとのぞいてみましょう。

今回のおはなし

利用者の「できる力」を引き出す～「夢のみずうみ村」の取組

講師について

藤原 茂 (ふじわら しげる) 先生

社会福祉法人夢のみずうみ村 理事長 (作業療法士)

平成 13 年に山口県内にデイサービスを開設後、相次いでデイサービスを開設。現在、山口県内のほか、千葉県浦安市、東京都世田谷区でもデイサービスを運営。大槌町内に「子ども夢ハウスおおつち」を開設し、被災地支援にも取り組んでいる。



「過介護」は利用者の介護度を悪くする

「これまでの介護は、一生懸命に介護して利用者の「できる力」を奪っている。それで要介護度が悪化し、施設の収入は増えるが、本当にそれでいいのか?」と、藤原先生はアクションを交えて力強く語りました。



平成 25 年 12 月 12 日午後、大船渡市盛町「カメラリアホール」で、被災地の介護従事者や地域包括支援センター職員を主な対象とする研修が開催されました。開催した「いきいき岩手支援財団」のお話によると、昨年度も実施したところ、非常に受講者の評価が高かった内容であり、今年も来ていただいたとのこと。聞く前から、期待感が高まります。

先生の運営するデイは、レスパイトのための施設ではなく、本人が望んで行く「人生の現役養成道場」の看板を掲げているとのこと。その特徴的な方式を「夢のみずうみ村方式」と名付け、広くオープンにしています。今日の講演では、そのポイントについて解説していただきました。

「夢のみずうみ村方式」のポイント

① 意識の眼ざめ現象、意思のはじけ現象

高齢者の「**感激の素**」を介護職員が見つけて拾い上げ、利用者に提示できるかが重要とのこと。先生は、「**達成感のシャボン玉**」(＝一瞬で消えていくもの)が積み重なるうち、それが「**有能感のゴム風船**」(＝ある程度持続的なもの)に変わり、それが「**生きがいアドバルーン**」(＝確固たるもの)として形成されていく過程が、次の目標に向けた意思の力を引き出すのだと、たとえを交えて分かりやすく話されていました。



② 自己選択・自己決定方式

「夢のみずうみ村」には、通貨「**ユーメ**」があります。これは、サービスの対価支払いの手段ですが、「銀行」から引き出すこともでき、特定のプログラムや手伝いの報酬にもなり、「カジノ」で増やすことも可能とのこと。

使えるサービスはかなり豊富な「自己選択・自己決定方式」。食事の時間のみ固定で、利用者は好きなことを選んで過ごしています。ちなみに、食事はバイキング方式で、料理を作るのも、後片付けをするのも利用者自身が行うそうです。

③ 引き算の介護・「できそう網」

先生は、「介護職員は、「**できそうかな**」という意識を常に持ってほしい。絶えず「**できそう網**」を張りめぐらせてほしい」と話されていました。そして、「できないからと何でも代わりにやってしまうのはおかしい。利用者ができることを見極め、やるまで見守り、できないときだけ手伝えるのが介護の原則」と熱く語ります。

施設職員が「手伝った方が早い」「やらせてもうまくできない」と言って、**利用者の「できる能力」を奪わない**こと。利用者に寄り添い、できそうな部分は介護から手を引いて「待つ」ことの重要性を、先生は特に強調していました。



④ 「ゆめ」の3階段

先生は、「目標は、3段階に分けて立てるのがよい。」といます。それは、「**つかめる夢**」(展望台)、「**つかめそうな夢**」(低い山)、最後の「**夢のまた夢**」(高い山)のこと。

目標を段階的に達成しようと取り組むことで、「生かされる」状態から、強い意思を持った「**生・き・る**」という状態に持ち込むのが目的とのこと。目標をどのように設定できるかが、施設の力の最も問われる部分だといいます。

⑤ 「バリアあり」のすすめ

夢のみずうみ村では、環境やプログラムに様々な仕掛けを用意しているのが特徴です。「台所・居間」的な生活の場で勝手に過ごす雰囲気を感じており、利用者が寄りかかって歩けるよう、タンスを並べているのが特徴です。さらに、様々な道具、段差や坂、死角といったバリアのほか、「札所」やクイズなどの仕掛けが用意されています。利用者はこれを克服しながら、外で歩ける力をつけていくとのことでした。

⑥ 「宅配ビリテーション」を知る

利用者がせっかく獲得した能力は、**自宅でも継続できるようにすることが大事**なことです。そのため、夢のみずうみ村では、陶芸、園芸、料理など、自宅でもそのまま続けられるメニューを用意しているとのことでした。

最後に、先生は「施設は利用者の「生・き・る」意思を支援することが重要だ。不便でも生活に支障がない状態にするのがリハビリテーションだ」と話をまとめ、「職員は、目の前のあなたを私は放っておけないという気持ちで、**常にハートフル、パワフル、スマートフルであってほしい**」と、介護職員への期待を語りました。

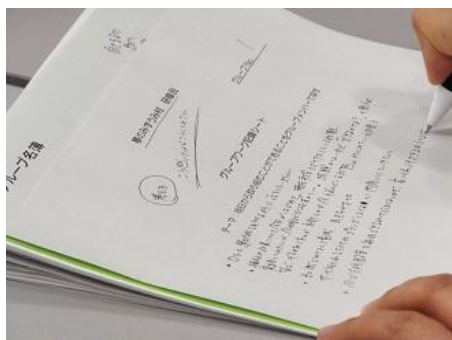


グループワークで議論

講演に引き続き、中ではグループワークが行われ、これまでの先生のお話を受け、自分の働く施設で今後どのように生かしていくかが話し合われました。

参加者からは「**このお話を明日からでもすぐに生かしたい**」「**事業所に内容を伝えたい**」と前向きに受け取る意見が多く見られました。

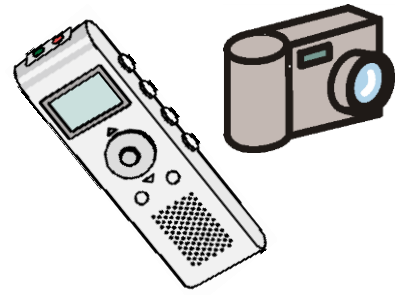
一方で、施設職員からは「**これまで時間に追われるように利用者を介護してきた**」という反省の弁や、「**遅くなると、後のシフトの職員から『なんでやっててくれないの』と文句を言われるし**」といった、現実との狭間で対応に苦慮する意見などもあり、短い時間ながら、様々な受け止め方をしているようでした。



インタビュー

ここ大船渡には、認知症の人や家族の心の支えになるために、一人がんばる電話相談員がいます。

今回は、「いわて認知症の人と家族の電話相談」を担当する今野光子さんに、取組状況をインタビューしました。



——今年、どのくらいのペースで相談がありますか？

平成25年度は、12月24日時点で196件の相談がありました。去年よりも増えていますね。特に、新聞で紹介されると相談が多くなります。

——相談を受ける際に、心がけていることは何でしょうか？お一人だと、なかなか大変だろうと思われませんか？

常に傾聴し、「家族の目線」で相談に応じるよう心がけています。そのためか、話しやすいからと何度も電話をしてくる方もおられます。

相談室では一人ですが、「一緒に手伝うよ」と言ってくださる方もいます。また、認知症疾患医療センター（岩手医大）や、各地の地域包括支援センターと連携しているので、必要に応じて情報交換ができるのでとても助かっています。施設の人も相談に乗ってくれます。

——最近、どのような相談が多いですか？

認知症の人が運転すると危険なので、家族から免許証の返納について相談を受けることが多いですね。御本人はとても嫌がるので、家族だけで対応できない場合、私が間に入って、病院や警察の方と事前に話をすり合わせる必要があります。医師に説得してもらったり、警察で書類を出すのをスムーズにしたりして、これまで3件の免許証返納事例があり解決しました。地域包括支援センターに

解決方法を提供したこともあります。

あと、若年性認知症の人の居場所がないことについての相談もあります。高齢者向けのサービスだと、なかなかなじめなくて苦労しているようです。

——相談は、1回で解決しますか？

一度相談で関わると、何度も電話してこられる方が多数おられます。お亡くなりになるまで数年間関わることもよくあります。

——今日は、お忙しいところをありがとうございました。がんばってください。

「いわて認知症の人と 家族の電話相談」

- ◆受付時間 月～金 9:00～17:00
(※土・日・祝日及び12/29～1/3はお休み)
- ◆連絡先 0192-25-1616



取材を終えて・・・・・・・・

「夢のみずうみ村研修会」に参加し、藤原先生の講演を拝聴させていただきました。昨年も同様の講演があり、多くの参加者から大変好評をいただき、本年度も開催を望む声が多かったと伺っています。藤原先生の介護方法は全国的にも注目されています。

要介護高齢者が本当に望む介護とは何か、残存能力を伸ばす介護とは何かなど非常に考えさせられる興味深い内容であり、かつユニークな事例の紹介もあり、予定時間があっという間に過ぎてしまいました。多くの介護保険事業者が出来高主義である介護報酬を算定し、事業の採算性を確保することだけに着目しがちになりますが、介護従事者にとって、介護を目指した頃の志がよみがえったのではないのでしょうか。

後半に行われたグループワークでも、若い介護従事者の方々が「自分たちの事業所でも、できることから取り組んでいきたい」と語っていたことに、少しだけ介護の明るい将来を見た思いでした。
(なんでも取材班「お」)

今回は、高齢者が元気な力を取り戻すヒントとなる、貴重なお話を特集しました。私は昔、仕事であちこちの特養やデイサービスを見て歩いたことがあります。施設の職員の皆さんが、たくさん的高齢者を献身的に介護し、見守っている姿を見て頭が下がる思いでした。その一方で「自分だったら、このベッドで一日ごろごろし、童謡を歌い輪投げをして過ごすなんて生活は、きっと耐えきれないだろうな」という気持ちもありました。

「夢のみずうみ村」では、どうすればこれだけ豊富なメニューを用意できるのか、と思うような様々な過ごし方があるようです。そしてそれは「短時間で効率的に多数をこなす介護」や「何でもしてあげる介護」とは一線を画した、ひたすら利用者の自主性と快復力を尊重するもの。すぐにこれが標準になるとは思えませんが、この先自分が高齢者になったとき、はたしてどういう介護が常識となっているのか、ついつい考えてしまいます。

(なんでも取材班「ふ」)

今の介護予防事業には「男性の参加者が少ない」ことが大きな課題の一つとして挙げられていますが……。今回の魅力いっぱいのお話の中でも、「夢のみずうみ村」では男性の参加者が多い、というところに注目しました。

「夢のみずうみ村」では、一日のメニューはバイキング方式のように、利用者が興味のあるメニューをセルフサービスでコーディネートすることから始まります。そこには画一でない、自らの役割や居場所が見つかります。利用者の「感激の素」につながるコクと風味は、介護職員の企画力と、その企画を吸い上げて生かす施設の力です。

今後の介護予防事業は、利用者一人ひとりの好みに対応でき、リハビリ専門職のアドバイスを生かす方向への転換が求められます。こちらでも、「自分が参加したくなる」ような介護予防事業、周囲が「あっ！そんなこともできるの？」というメニューを考えてみたいものです。
(なんでも取材班「つ」)

「ちいきで包む」は、岩手県内市町村の地域包括ケアシステム構築をアシストするため、各地の特色ある取組や、関係する情報を発信する情報紙です。

企画・発行（問合せ先）

岩手県保健福祉部長寿社会課（本号担当：岡本・藤原・妻田）平成25年12月25日発行

TEL:019-629-5432 FAX:019-629-5439 E-mail:AD0005@pref.iwate.jp